

# 図書室という場所

恩田 陸

子供の頃、私は図書館に行ったことがなかった。

本に対する執着が大きかったせいである。手に入れた本は全部手元に置いておきたかったので、いったん借りた本を返す、というのが苦痛でたまらなかったのだ。それは漫画雑誌でも同じで、いったん買った雑誌を手放すというのは考えられなかった。当然、購読雑誌が増えるにつれ、どんどん部屋が埋まっていく。母親が増えた雑誌を処分してもよいかと言おうものなら、それこそ「絶対嫌だ」と身をよじって抵抗した。しかし、転勤族だった我が家には「引越し」という大技があり、集めたバックナンバーは、その都度あえなく処分されてしまったのであった。

だから、小学校時代、図書室は大好きだったが本を借りたことはあまりなかったと記憶している。当時、授業に「図書室」というコマがあり、それは図書室で調べ物をしたり本を読んだりする時間だった。私は気に入った本ばかり繰り返し読んでいたし、更にその本を

親にねだって買って貰っていた。しかし、学校図書室用の本だったのか、ついに書店で見つからなかった本、何度繰り返し図書室で読んだか思い出せないほど好きだった本は今でも覚えている。『オレンジ色の猫の秘密』はその中でも特に印象に残っている一冊で、世界十カ国の児童文学作家が書いたリレー小説という珍しい形式。日本からは今江祥智さんが参加しておられ、イラストを山藤章二さんが描いておられた。

小学校の図書室の思い出で、今でも不思議に思っていることがひとつある。

私は小学校六年生の一年間を秋田で過ごした。この小学校六年生という時期は、SF小説に目覚めた時期として私の中では位置づけられている。それはこの小学校の図書室にあったと思う。とても天井の高い図書室で、天井近くに全集ものが置かれているのはどこも同じだが、ここには早川書房の世界SF文学全集があったのだ。こう書きながらも、私は内心半信半疑で

ある。小学校にこの全集があるというのは、あまりに凄くないか？ もしかして、中学か高校の図書室と記憶を混同しているのではないか？ しかし、私の記憶の中ではこの図書室で、その背表紙をじっと見上げていたことになっている。読んだ記憶はない。確かその全集は、禁帯出扱いだったので、借りて返すことに耐えられる自信がなかったからだ。憧れのSF、それが図書室で見上げていた世界SF文学全集のイメージとぴったり重なっているのだ。そこにそれが本当にあったのか。願望とか、夢で見た光景を記憶にすりかえているのではないか。今も謎である。

「借りて返す」という行為によく慣れたのは中学生になってからだ。この頃から乱読時代に突入したので、「読みたい本を全部買っていたら、今の小遣いでは全然足りない」という単純な事実気付いたためである。いちばんお金のなかった学生時代は、学部の図書館や区の中央図書館など、とにかく借りられるところから借りまくった。今のようにバーコード管理ではないので、処理できる本の数に限りがあったのだろう。一度に借りられる冊数は少なかった。すぐに読み終わってしまうので、まめに通って数を稼いだ。それでも、借りて気に入った本を買い直す、という習慣は変わりなかったし、それは現在に至るまで脈々と続いている。いちばん好きだった図書室は高校の図書室である。

それも、夏の、窓を開け放した図書室。

窓の外には青々と繁った木があって、時折すうっと涼しい風が入ってくる。どっしりした大きな古い木の

テーブルの、ひんやりした感触。

「図書室」という場所をイメージする時、思い出すのはあの場所だ。夏のイメージしか浮かばないのは、私の高校は職員室と医務室以外に暖房がなく、冬の図書室は寒すぎて本を読むどころではなかったからだ。

図書室といえば、子供の頃から、萩尾望都の漫画『トーマの心臓』の影響か、「好きな人が読んでいる本を追いかけて読む」という行為に憧れていた。しかし、実際のところ、クラスが違えば何を読んでいるかなんて分からないし、そもそも私が好きになる男の子は本など読まない子ばかり。早々に夢の実現はあきらめたけれど、本の後ろに貼ってある「この本を読んだ生徒の履歴」というのはなかなか興味深いものだった。意外な本に意外な名前を見つかったり、同じ人が何度も借りていたり、結構前に購入されたいのに誰も借りていなかったり。どんな本を読んでいるかは重要な個人情報である、という認識が広まってきているので、きつと今後は学校図書室の本も他人には借りた人の履歴が分からない方向になっていくのだろうが、そういう密かな楽しみも否定されてしまうのはなんとなく淋しい。この、本の見返しに貼ってある貸出履歴というのは、ミステリのネタになりそうだな、と長いあいだ考えていて、ようやく使うことができたのが「図書室の海」という短編小説である。

かつては「図書室の本を全部読んだらしい」悪魔的に頭のいい卒業生の伝説、というのがこの高校にもあったものだ。実際、私と読む本の趣味が似ていたの

か、一時期、借りる本借りる本、どれにも必ず同じ男の子の名前があった、という経験がある。私とは入れ違いに卒業していた生徒だったが、その筆跡がとても癖のある筆圧の強い字で、以来私には「頭のいい男の子は字が汚い」という先入観があるのである。

二年くらい前に、久々に母校の高校を訪れる機会があり、図書室に行ってみた。

二階の外れ。窓の外の青々とした枝。

記憶の中の風景と変わらぬ場所です。OBが書いた本、というコーナーができていたのが当時と異なるところで、私の本も多数並べてくれていたのが照れくさかった。しばらく中をうろろし、なんとなく手に取った本をパラパラ眺めていたら、とある本の後ろの履歴に私の名前を見つけて「おお」と懐かしくなった。

その本とは、恥ずかしながら、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』である。

高校の図書室で借りた本で強く印象に残っているのは、この本とキイスの『アルジャーノンに花束を』という、我ながらベタな青春時代であった。ついでにいうと、私が本を読んで初めて泣いたのは三浦綾子の『塩狩峠』で、二番目が『アルジャーノンに花束を』だった。しかも、『塩狩峠』はクライマックスの場面ですぐしゅぐしゅ泣いていたのに、『アルジャーノン』のほうは、読んでいる時はなんともなかったのに、読み終わって訳者あとがきを読み始めたら、いきなりダーンと涙が溢れてきて、「あれ？ あれ？ なんで？」と、泣い

ている本人にもその理由が分からなかったことをよく覚えていた。

図書室。その言葉と場所に、なぜか気恥かしさと甘酸っぱさを感じてしまうのは私だけだろうか。本好きだと表明するのは、けっこう勇気がいるものである。個人の趣味と知的レベルを曝け出すのは、思春期にはたまらなく恥ずかしいからだ。それだけに、本の話でできる友人を見つけると世界が明るくなったような喜びを覚えた。本の話をした友人のことは今でもよく思い出せるし、何の本の話をしたかまで覚えている。

今も私の一部は、いつも夏の午後のあの図書室で、吹き抜ける風を感じながら本を読んでいるような気がしてならない。

**恩田 陸（おんだ りく）** 作家。一九六四年、宮城県生まれ。ファンタジーノベル『六番目の小夜子』でデビュー。さまざまなジャンルの小説で幅広く執筆。『ノスタルジーの魔術師』と称される。二〇〇五年『夜のピクニック』で第26回吉川英治文学新人賞、第2回本屋大賞を受賞。